

私は〇〇〇〇（個人名のため伏字とします）と申します。よろしく申し上げます。年齢は75歳、高齢になりました。

今も協会の会員の皆さんがいますが、私はその昔、協会の先輩からたくさん学び交流をしてきました。今は、若い会員の皆さんの伝統的手話は消えつつあって新しい手話での会話が通じないことがあり、先輩方と会話が弾んだ時のようには、なかなかいきません。

まずは、聾学校でのことをお話ししたいと思います。私は、昭和28年4月7日だったと思いますが入学しました。自衛隊駐屯地前に、今は「いとく」「サンデー」等のお店がいろいろありますが、かつてはその場所に聾学校があったのです。昭和26年に聾学校が建てられ、それまでは南通りにあった盲啞学校から聾の生徒だけが分かれてというかたちで移転建築されたわけです。移転が昭和26年ですから、入学当初の昭和28年はまだきれいな校舎でした。

その頃、私は自分が聞こえないということを全く知りませんでした。入学の時、先輩方が2階からこちらに向かって呼ぶ合図しているのが見えました。だれかを呼ぶ時のイメージとはかけ離れたものでした。その時のことを私はずっと忘れませんでした。

聾学校といえば、口話教育についてとても厳しかったのです。「手話」という言葉が認知されるまでは、「手まね」という言葉でした。「手まねをやめてお話ししましょう」という標語が校舎の柱や廊下のいたるところに貼られていました。発音重視であったことから、ア・イ・ウ・エ・オ等の発音の訓練をしました。小学1年から小学3年までの3年間は、ひたすら50音の発音を集中的にさせられる授業でした。私が小学

4年生の時は、小学1年生の教科書で学びました。本来1年生が使う教科書ですので簡単な内容だったのだと思いますが、先生の言っていることが読み取れないので内容がよくわからないままでした。中学1年の時は小学4年生の教科書、中学2年時は小学5年生で、中学3年時は小学6年生ので学ぶというようにして、授業を受けていました。私が中学3年生の時に、小学6年生の弟と同じ教科書を使っているのです。納得しようにもできませんし、恥ずかしかったです。

高等部には木工科・被服科・理容科・印刷科の4コースがあり、私は木工科でした。木工科の生徒は6人いたと思いますが、そのうち今生きているのは2人だけで他の4人は亡くなってしまいました。

自分が学んだ頃というのは口話教育が厳しかったので、1時間目から6時間目までの間、お昼休みを挟んで午後3時頃まで、毎日ひたすら口型の読取訓練に時間を費やしました。昼下がりには暑さもあってつい居眠りしたくなりますよね。もし、居眠りしていると、チョークが飛んできたり黒板拭きや平手、棒でたたかれたり、とても厳しかったのです。授業でも「手まね」の言葉は固く禁じられていました。それは、学校だけに限ったことではなく、寄宿舎も同じでした。寄宿舎でも、学校と同様に「手まねをやめてお話をしましょう」と貼られているのです。トイレのドアに鏡が貼られていて、中がとっても臭くても口型の練習をしていました。学校と寄宿舎、同じ状況の中で暮らしていました。寄宿舎では厳しく、映画を観に行くことも禁じられていました。舎監の先生と寮母先生にばれないように抜け出して映画館に観に行っていた人もいました。他に、「平凡」「明星」という雑誌の購入も禁じられていました。買い物に行く時も、寄宿舎を出る時間と帰ってくる時間を必ず外出簿に書かなければなり

ません。とても厳しかったのです。まるで刑務所のようなイメージでした。

小学部1年から高等部3年までの12年間、学校教育を受けてきましたが、その時間のほとんどが厳しい口話法教育に充てられたため、日本語の意味がわからないことが多いのです。私は日本語の理解ができないまま卒業しました。

その後は、「わかる」「わからない」「食べる」「飲む」等、簡単な筆談はできると思っていました。社会に入り木工職に就いた後、筆談をしても通じないのです。例えば、「しぐ」と書かれているのですが、一体「しぐ」とは何のことだろうと思いました。実は「すぐ」のことなのですね。「すじかに」もメモを見てもわからなくて、相手がこのように唇に人差し指をあてているのを見て、「しずかに」だったのかと初めてわかりました。聞こえる人も聞き間違えたまま書いてしまうこともあるのだと初めて知りました。それだけではありません。「勉強」という漢字を「強勉」と反対に書いたメモがあり、「間違っているぞ」と私から教えてあげることもありました。このような通じない経験をしてきました。

この頃、本当に手話はダメか、口で話すのが良いことか迷って悩み続けていました。

先輩方の考え方をいろいろと学び、全国・東北の各大会や全国ろうあ青年研究討論会に参加し討論を重ね、学んできました。結局、手話は必要なのだと強く思うようになりました。

手話で話するろう者という、やはり「目」です。例えば、ほとんどの情報は目から入ってきます。私としては、この手話の方が合っていると思います。現在、このように耳側に手をすぼめていくような「情報」という手話が浸透しています。この手話表現は、聞こえる人たちには合っていますが、聞こえない人には合わないのです。ろう者

は情報が不足しがちですが、そこは先輩や仲間との多くの交流のおかげで、少しはいろいろなことを理解できるようになりました。

職場では、会話が通じず、上司や先輩に叱られたことも多々あります。給料も、聞こえる人たちと比べて低かったですが、腕のいいろうあ者はたくさんいます。聞こえる人よりも、腕のいいろうあ者を頼りにする社長や親方もいたくらいです。仕事を辞めたいと言うと、「昇給するから、どうか辞めないでくれ」と懇願される状況も多かったようです。

ろう者同士で結婚は認められず、ろう同士結婚したくても親に反対されて、聞こえる人との結婚を強いられる人もいました。青年研究討論会で結婚の問題やろう者には手話が必要であること等が討論されました。農業用運搬機であっても、ろう者が道路で運転することができない等、悔しい思いをしました。運転したくても法律上認めない、ろう者にとって厳しい現実が立ちはだかっていました。運転免許・結婚・手話・職場での差別・手話通訳設置の必要性について、関係機関との交渉等、長きにわたり運動してまいりました。ろうあ協会に入ってから57年目になります。これだけ長く運動を続けてきたのですが、まだまだ差別は残っています。例えば、設置手話通訳者の不足、さらに手話通訳者の身分保障が不十分な状況が続いており、ろうあ者として困っており不満が残っています。

また、聞こえる人たちには手話への理解もまだまだな状況で、障害にはろうあ、上肢下肢に障害がある等、様々な障害がありますが、「他の障害に比べてろうあ者の障害はまだましで、軽い。」とよく言われるのです。もう少しろうあ者についての理解が広まってほしいと思い、皆さんと共に聴覚障害者の福祉発展のため、頑張っていきた

いと思います。

私の姉弟は、上には女ばかりが4人、下は男が3人です。私の名前は「洋一」、つまり「一」だから長男というわけです。2番目の姉は目が見えないし、兄弟に障害者は二人なのですが、両親も一緒に家族団らん時、見えない姉は聞こえるので家族で楽しく会話できますが、自分だけが会話に加わることもできずに1人黙々と食べていたのです。いつも楽しくも、おもしろくもなく、寂しかったのです。見えない姉は家族と楽しく団らんできますが、家族みんなが少しでも手話でお話ししてくれたらなあと思っていました。父は、手まねはよくないと、聾教育と同じ考え方でした。近所の人たちにお前の手まねが見られたら恥ずかしい、笑われてしまうから手まねはやめなさい、口でお話しなさいと散々言われたものです。例えば、アイウエオのような発音はできますが、相手の言葉の読み取りが難しいので会話のやり取りが十分にできないのです。小さい時は聞こえていたので、秋田弁で「あべ（行こう）」や「あば（お母さん）」「おど（お父さん）」「ぼっぼ（弟）」と言っていました。私は姉たちの名前を「ヤエ」「フミ」などと呼べるけれど、その姉たちとの話が通じなくて困りました。

正月のお祝いの時に家族そろって楽しく団らんしたり、12月31日の「紅白歌合戦」という番組を見たりしますよね。その紅白歌合戦は、私一人だけ聞こえないので全くつまらないのですが、家族はその番組が始まるととても盛り上がるし、熱中して見えています。私は音楽も歌もわからなくてつまらないのです。また、「忠臣蔵」という番組でも字幕がついていないのです。登場人物のどちらが良い者、悪者なのはわかるのですが、口型を読み取るのが大変で、話の内容がわからなかったのです。家族には「長男として家や田畑全て継ぐのだよ」と言われましたが、私は後継ぎにな

る気持ちはありませんでした。もし、後継ぎになれば、情報もないし楽しみもないからいい人生が送れるか心配で、良い人生とは何なのかと来る日も来る日もとても悩み続けました。そして、卒業前に決心して父に向かって言いました。「私は家を継ぐつもりは全くありません。秋田市に出て仕事をします！」と父に反発し激しく言い合った結果、父は諦めました。自分は家族の中でいつもひとりぼっちであること、地域でも、「あいつは話せないし何だか声も変、オシ、オシ」とからかわれたりして、そんな自分が本当に将来は家の後を継ぎ、安心して暮らすことができるのか、きつこの先も肩身の狭い思いをして生きていかなければならないと思うと、とても心配だったのです。私は決意し、母や姉たちの「お前が継ぐべきだ」という言葉をも跳ね除け、秋田市で仕事に就きました。

今振り返ってみますと、後継ぎとしての実家暮らしよりも、いろいろな情報がある秋田市で生活できて幸せだなと思いました。